

八王子市郷土資料館 だより

vol. **93**

2013. 7

HACHIOUJI CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS



古い写真を読む ㊹ 府立第二商業学校の全景写真（昭和12年4月撮影）

目次

P.1 古い写真を読む ㊹

「府立第二商業学校の全景写真（昭和12年4月撮影）」

P.2 八王子出身の将校 和智昭元

P.3 戦時中の団栗採集

P.4 土中から見つかった道標

P.6 古文書からみる八王子宿

P.8 上野原にもあった加藤鋳物師の梵鐘

写真は、桑友会所蔵の航空写真である。写真正面には、本校舎、その右には講堂などがみえる（現在、旧敷地の一部に、郷土資料館が建っている）。

大正9年（1920）4月、府立第二商業学校が八王子に開校した。当時の柴田市長をはじめとする八王子市民の実業学校誘致活動が結実したものだ。中央線の踏切から富士森公園までの通りは桜並木になり、花見の頃になると通り沿いは賑わいをみせたという。（こん）

八王子出身の将校 わちてるもと 和智昭元

小林 央

掲載資料(1)は昭和12年(1937)12月8日に発行された国際劇場のパンフレットです。国際劇場は同年7月3日浅草に落成した松竹直営の劇場で、当時の触れ込みは「世界三大劇場」「東洋一の五千人劇場」でした。昭和57年(1982)に閉館となり、跡地には浅草ビューホテルが建ちますが、現在も「国際通り」という道路名称にその歴史をとどめています。

さて、紹介するのは、この劇場自体ではなく、パンフレットの中に記されたその演目で、市川猿之助一座と青年歌舞伎が師走18日から合同で興行した「加納部隊長最後の日」というものです。作・演出は川口松太郎、加納部隊長役は市川猿之助が演じています。演目の内容は、昭和12年(1937)7月7日の蘆溝橋事件をきっかけに始まった日中戦争(当時の日本政府は「北支事変」のちに「支那事変」と呼んだ)が舞台です。戦闘の中心は当初の華北から、翌8月には中支(上海市周辺)に移り、9月には日本本土から上海派遣軍が編成されてただちに増援に赴きます。そして、10月11日、上海周辺の沼沢地帯の激戦の中で加納部隊長とその配下で副官の和智少尉が戦死、そのほか十数名の死傷者を出しました。この部隊長と副官二人の死は本土にも「名誉の

戦死」として翌日12日附けで報道されています。そしてこの和智少尉こと^{わちてるもと}和智昭元氏は八王子市本町出身で、応召当時は小宮第二尋常小学校(現・市立第九小学校)に勤務する訓導(先生)だったのです。

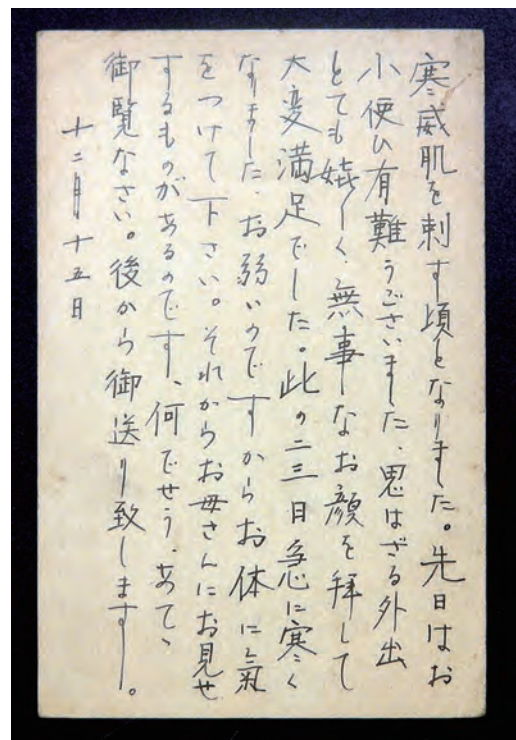
当時上海の日本軍は、待ちかまえる中国軍とクリークと呼ばれる沼沢地帯、そして河川に阻まれる中で奮戦し、加納部隊の働きで見事渡河に成功。上海から南京へと進行していきます。当時の新聞の見出しには、「壮絶・硝煙に散る勇士 裸身に剣負って 敵前渡河・敵舟を奪ひ取る今は亡し 和智少尉の奮戦」と記されています。

こうした開戦直後、戦地に増援軍として派遣され、戦局の打開に貢献した二人の死は、歌舞伎界においてもそれを題材として演目が制作され、同年の12月から翌年の6月にわたって東京や大阪の劇場で、おもに市川猿之助一座によって公演されました。

本年の戦争関連夏季コーナー展示(7月19日～9月1日)では、この和智少尉の遺品を中心に日中戦争の緒戦に散った八王子の青年教員の足跡を辿ります。一般兵卒の上位にあり、指揮官たる「将校」ならではの品々もこの機会にご覧下さい。



(1) 国際劇場のパンフレット(昭和12年)



(2) 和智昭元が幹部候補生として赤坂歩兵第一連隊で訓練中、母に宛てた葉書(昭和6年)

子供のころ、秋になると公園や寺社の境内に沢山落ちている団栗どんぐりを拾ってままごとをしたり、独楽を作って遊んだ思い出がある人は多いでしょう。

団栗は、戦時中重要な資源として大量に採集されました。この任務にあたったのが小学校（昭和16年からは国民学校）の生徒でした。団栗の採集は、昭和15年（1940）の秋から始まりました。目的は、団栗から軍靴や馬具の材料である皮革をなめすタンニンや、アルコール、カラメル（醤油着色剤）、ブタノール（軍需用の塗料に用いる）を生産することでした。搾りカスは、家畜の飼料になるとされました。当時小学校に配られたチラシの文頭には、「集めよ団栗！！ 一粒の団栗もお国の為」という標語が印刷してあります。

採集にあたっては、腐っているものや虫食いのもの、水に浸けて浮いたものは取り除くこと、水洗い後は三日間日光で乾燥させること、五貫目、十貫目、十二貫目単位でカマスや俵に入れて、重量と学校名の表示を付けるなど細かく決められていました。団栗は、一貫目（約3.75kg）につき二十銭になりました。

昭和18年、国内の物資不足が徐々に深刻になると、団栗採集には、更に食糧にするという新しい目的が加わります。東京都森林組合から各小学校長宛の通知文には、「食糧の自給自足は目下、緊急を要する課題である。従来団栗などの実は郷土食として愛用されており、研究の結果、一般向けの主要食糧として相当の利用価値があると分かった。国策の一環として生徒に団栗採集の趣旨を十分に理解させ、七百石（約126,000 l）増の割り当てもあることから“飛躍的大増収”になるように」と協力を求めています。

当時、米不足の解消と自給自足体制の確立のため、地方に伝わる麦や粟、蕎麦、大根、さつまいもなどを主食に多用する郷土食が注目されました。戦時中、郷土食については総合的な調査がなされています【注】。それらによると、東北地方や広島県、天草半島などでは、団栗で「かしのみこんにやく」や団子、餅を作ったという記載があります。しかし、これは飢饉の時の食べ物で普段には食べなかったようです。団栗はとても渋いので、食べるには皮を剥いて石臼などで粉にして、三、四日間水にさらし、穀物の粉などを混ぜて団子や餅にするという大変な手間が掛りました。団栗は、従来飢饉の際の救荒食きゆうこうじよくであったのが、戦時中には地方に伝わる大切な郷土食とされ、米に代わる主食として過大な期待を背負う事となったのです。

この年、市内の陶鎔国民学校（現・陶鎔小学校）の生徒は、三十六斗（約649.4 l）の団栗を集め、二十四円十二銭で買い上げられました。

【注】昭和16年の秋から民間伝承の会が大政翼賛会の委託を受け、全国の食習慣の調査を行っている。また、昭和19年には農商省が中央食糧協力会に委嘱して郷土食慣行の実態調査を行い、『本邦郷土食の研究』にまとめられた。



写真：国民学校に配布された団栗採集のチラシ（昭和18年）

土中から見つかった道標

中村 明美

浅川橋を渡った国道16号沿いの中野上町1丁目(浅川橋と清水橋の間の東側)で、建物の建設工事中に土中から安政2年(1855)の道標(写真参照)が発見されました。道標とは道の分岐点などに建てられ道案内を目的にしたもので、馬頭観音・庚申塔などの供養塔に道名を刻んだものもあります。江戸時代に入り庶民の旅行が信仰を背景として一般化してくると、目的地や方角や道のり・造立者名や建立年などが一緒に彫られるようになっていきます。

甲州道中沿いの八王子宿から拝島方面に向かうには、極楽寺の前を通過し浅川を渡ります。発見された道標は川を渡った道の分岐点(地図参照)に建っていたと考えられ、拝島を經由し北へ向かう日光道中と、五日市から御嶽山(みたけ)に向かう西方向、八王子宿を通過し大山(現・神奈川県伊勢原市)の南へ向かう3方向を案内しています。

日光道中は八王子千人同心が日光火の番の職務のために、慶応4年(1868)まで利用した道です。御嶽山(現・青梅市)は中世から修験道が盛んで、農耕や邪気火盗難除の神として関東一円の農民の信仰を集め、毎年春には多くの参詣者が登拝していました。大山は雨降りや農作物の出来をつかさどる霊山として人々の信仰を集め、大山参りは江戸時代末から関東一円に広まりました。また今熊山(現・上川町)は、行方知れずの人やものを尋ねる呼ばわり伝説で名高い霊場として知られており、庶民の寺社参詣が盛んだったようすがうかがえます。

この道標が建てられる2年前の嘉永6年(1853)6月、アメリカからペリーが浦賀に来航し開国を要求、国内は物価の高騰・流行病や尊皇攘夷運動などで政情不安な世の中でした。このような時代に、浅川をはさみ対岸に位置する八幡宿(現・八幡町)・元横山村(現・元横山町)・中野村(現・中野町ほか)の人々により道標が建てられました。

発願人は中野村の福嶋太郎左衛門と八幡宿の万年屋清兵衛です。万年屋は文政元年(1818)、甲州道中街道筋の八幡宿(店の位置は八幡町の交差点から少し西よりの甲州街道沿い)で旅人にお餅や塩まんじゅうを売るお店から始まった菓子屋(現在の青木万年堂)でした。道標の造立に関わったのは二代目清兵衛のようです。

また嘉永7年(1854)の『番組合之縮図』(千人同心の名簿)に名前が載っている中野村の小池兵馬と込谷民五郎ですが、道標の寄附者として名前が彫られており(道標では民五郎の五の字は推定)千人同心が関わっていたこともわかります。

道標の型は上部が山状の角柱(四面)で、下の台座は紛失していますが、文字は深いところでは2cmほど彫りこまれ、各文字はベンガラ[注]と思われる朱色で彩色されています(写真1・2参照)。

この道標は、江戸時代の旅人の目にどのように映ったのでしょうか。土中からよみがえった一つの道標が、八王子のひとつの歴史を語りかけているようです。

[注] 酸化鉄で、経年変化に強く日光による退色がないことが特徴の天然素材。

[主な参考文献]『八王子和菓子組合の歩み』小林直之著書 1987年、『青梅市史』青梅市 1995年 ほか



地図「神奈川縣武蔵国南多摩郡八王子驛」明治14年測図 1/2万(●印が道標が建っていた推定場所)



写真1・2 文字部分拡大



写真3 道標(上部)



写真4 道標(底部)



写真5 道標（各面）

碑面は 153 cm × 33 cm × 33 cm 上部を含む最大高は 160 cm（「南大山みち」の面取り部分は幅 5 cm）

名連御附寄

□山彦左 □
 □小池宗兵衛 □
 □小池林兵衛 □
 □平嶋浩郎左工門 □
 □小池兵馬 □
 □込谷民□郎 □
 □山田林右衛門 □
 □西山久兵衛 □

南大山みち

八王 子通

左みたけ山道

是より 川口
 六里 今熊山道
 五日市

右日光道中

拝島迄
 二里

安政二年
 卯九月吉日

世 中野村 小池□作
 元横山村 河合三悦
 人 右村役人

癸願人中野村 福嶋太郎左衛門
 同八王子八幡宿 万年屋清兵衛

□ は不明および推測

古文書からみる八王子宿

加藤 典子

当館ではこの夏、コーナー展「タイムトラベル 江戸時代の八王子に行く」と題して甲州道中八王子宿の繁栄と宿を往来した人びとについての展示をおこないます。これに先立ち、八王子十五宿の中でも八日市宿で本陣をつとめた新野家に残る文書資料の一部をご紹介します、八王子宿の様子を見ていきます。

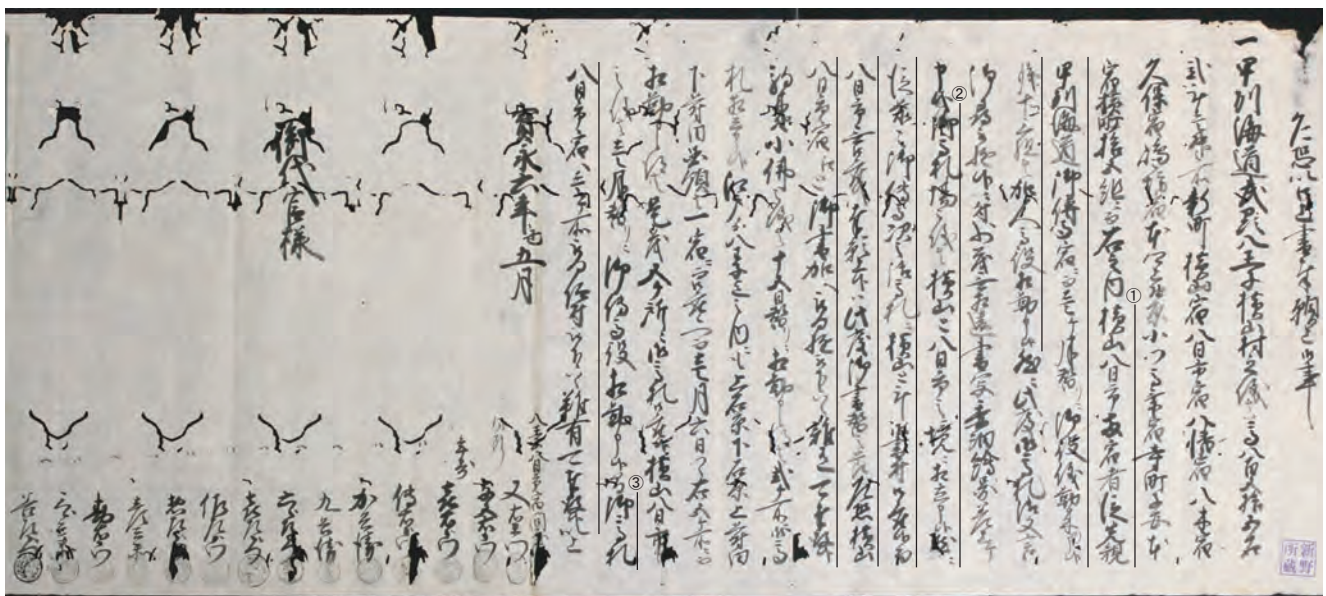
【資料1】に掲載した古文書は宝永6年(1721)に八日市宿問屋・年寄から代官所に提出した願書の控えです(1)。冒頭に「甲州海道武州八王子横山村之儀は高八百五拾石式斗三升之所、新町・横山宿・八日市宿・八幡宿・八木宿・久保宿・嶋之坊宿・本郷・上野原・小門・馬乗宿・寺町・子安・本宿・横町拾五組」とあります。八王子宿とは上記の十五宿の総称で、横山十五宿とも呼ばれました。傍線部①には「横山・八日市両宿は先親より甲州海道御伝馬宿にて壹ヶ月替りに御役儀勤来り申候、残十三組は加人馬役相勤申候」とあります。十五宿の中で横山宿と八日市宿は幕府の公用人馬を継ぎ立てる伝馬宿であり、人馬継立の事務をおこなう問屋場が設置されていました。人馬を用意し人や荷物の輸送にあたったのです。資料からは横山・八日市両宿が一ヶ月交代で伝馬役をつとめていたことがわかります。また、その他の十三宿は補助の役目を担っていました。

甲州道中は内藤新宿から上諏訪までの45宿32継です。上りか下り一方のみの継ぎ立てをおこなった宿があるため、宿数と継立数が一致しません。伝馬役を担う各宿には人足25人・馬25疋が常備され

公用人馬の継ぎ立てに備えました。当初は幕府御用の継ぎ立てが無賃でなされていましたが、参勤交代の開始による大名行列の通行では規定額の宿への支払いが義務づけられました。これを御定賃銭おさだめといいます。さらに一般武士や庶民の通行も盛んになると私的利用の賃銭は相対賃銭とされ、直接交渉によって金額が決定しました。これは御定賃銭の約二倍程度であったといえます(2)。

【資料1】の文書に戻りましょう。差出人中「八王子八日市宿問屋 与五右衛門」とあるのが新野家の人物です。新野家は八日市宿の「問屋役」でした。補佐をつとめる「年寄」とともに宿役人として人馬継立事務のいっさいを問屋場で取り仕切りました。また、新野家は高貴な人々の宿泊施設である本陣としても機能しており、彼らの宿泊記録が残っています。大名の止宿などの際、本陣では座敷割りや家臣団の宿割りなど煩雑な仕事が多々ありました。新野家には宿割りの資料や本陣の軒先に掲げられた関札【資料2】などが残っています。八日市宿では新野家と山上家が本陣・脇本陣の役割をつとめていました。

さて、【資料1】の傍線部②には「御高札場之儀は横山と八日市之境に相立申候、然に従前之御伝馬次之御高札に横山とばかり御書付御座候て八日市無御座奉願上候は、此度御書替之節乍恐横山八日市宿へと御書加へ被為遊被下候はば難有可奉存候」とあり、八日市の宿役人が代官所に対して出した要望です。高札場とは種々の触書などを掲示した場所をい



【資料1】「乍恐口上書奉願上候御事」(宝永6年5月)

います。この一文から当時横山宿と八日市宿の境に高札場があったことがわかります。成内家文書「元禄九年検地絵図」には両宿の間に高札場を示す記号が描かれており、八王子十五宿には高札場が一か所あったことが確認できます(3)。さらに傍線部②では、この高札場に従来掲げられてきた伝馬に関する触書の記述に対して「伝馬役をつとめているのは横山宿と八日市宿



【資料2】関札

の二宿であるのに、これまでの高札には「横山宿」としか書かれていない」との不満を吐露しています。そこで、【資料1】の願書が出される以前に実際に掲げられていた高札を見てみましょう。高札の実物は残存していませんが、宝永4年(1719)7月の高札内容を筆写した控えが新野家に残されています(4)。「横山より日野へ駄賃銭壹駄に付七拾八文、乗掛荷は人共に同前、荷なしにて乗は五拾貳文、人足賃は壹人にて四拾文」とあり、「横山」としか記載がないことがわかります。このような状況に対して、高札の書き替えにあたり「横山八日市宿」と書き加えてほしいとの要望が出されたのです。

さらに傍線部③には「御高札八日市宿へ壹ヶ所被為仰付被下候はば難有可奉存候」とあり、八日市宿に新たな高札場の増設を願い出しています。増設の根拠として、十五日替りに伝馬役をつとめる駒木野宿と小仏宿には二か所の高札場があり、六日ずつ伝馬役をつとめる上石原・下石原・上布田・下布田・国領からなる布田五宿には五か所の高札場があることをあげています。これらの宿と同様に横山・八日市宿にも高札場が二か所必要であると主張したのです。1800年前後に描かれたとされる「甲州道中分間延絵図」には八王子十五宿内に二か所の高札場が確認できます(5)。元禄9年(1696)には一か所であったことから、要望に基づき増設されたことは確かなようです。しかし、絵図で確認する限り高札場が増設されたのは八幡宿と八木宿の間であることがわかります。これには横山・八日市両

宿の距離が近接していることなどが関係しているのでしょうか。詳細についてはわかりませんが、宿役人の要望はある程度果たされたようです。

最後に宿の要望に対する代官所の回答を受けて、八日市宿役人が周辺宿(日野・駒木野・小仏)に発した願書の控え(6)を紹介します。「横山宿八日市宿へ賃銭如何程と申儀御書加被為遊可被下候」とあり、各宿から「横山宿八日市宿」までの賃銭を高札に書き加えるように依頼しています。これは宝永6年5月付の資料で、【資料1】の時期とも合致します。したがって「横山宿八日市宿」と両宿が並列して書き加えられている点は注目に値します。八日市の宿役人が周辺宿に願書を出したのは、この点を変更修正するためであったのでしょうか。

このように八王子十五宿では横山宿と八日市宿が伝馬宿をつとめ、新野家のような問屋役が中心となって人馬継立の事務を担いました。その負担は多大なもので、人馬の用意や荷物運搬の人足の確保、宿泊地の割付など様々な手続きが求められました。飢饉で米穀が高騰した場合などは、宿や周辺助郷村が困窮し人馬継立が困難になる障害も発生しています。一方、幕府にとっても伝馬役を担う人々が仕事を請け負わなくなるような事態は避けねばならないことでした。幕府は人馬賃銭を割増するなど宿の負担軽減につとめる政策をとりつづけています。今回紹介した古文書中で宿役人から出された要望がある程度実現していることから考えても、伝馬宿の発言力は大きかったのかもしれない。また、八日市宿の宿役人が横山と並ぶ伝馬宿であることを強く主張している点からは、彼らの伝馬宿としての自負が感じられ、自治体制がある程度確立していたことを想像させます。

【出典】

- (1) 新野家文書「乍恐口上書奉願上候御事」(宝永6年5月)
- (2) 樋口豊治『江戸時代の八王子宿』(平成2年、揺籃社)
- (3) 成内家文書 早稲田大学図書館所蔵
- (4) 新野家文書「高札写」(宝永4年7月)
- (5) 東京国立博物館所蔵「甲州道中分間延絵図第二巻 府中・日野・横山」(昭和59年、東京美術)
- (6) 新野家文書「覚」(宝永6年5月)

江戸時代の八王子にいた鋳物師については、これまで何度か紹介してきました。

八王子には、おもに横川の加藤氏、また、八王子宿の師岡氏、長谷村氏という三家が活動していました。この鋳物師のなかでも、師岡氏、長谷村氏は、江戸時代の後半の活動が明らかとなっています。

今回は、江戸時代の八王子で活躍した鋳物師のなかでも、江戸時代前半から活躍している加藤氏の製作した梵鐘を紹介します。

今回紹介する梵鐘は、山梨県上野原市^{ゆづりばら}柗原の瑞光寺にあります。瑞光寺は、臨済宗のお寺で、天正3年(1575)に創建されたといえます。梵鐘の銘文から末寺を12カ寺かかえた市内でも有数の寺院だったことがうかがえます。

瑞光寺の梵鐘は、高さ1m28cm、直径66.7cm、銘文から、安叟徳全という人物が住職だった享保4年(1719)に製作されたことがわかります。

また、この梵鐘は、横川の加藤市良右衛門吉次と加藤半六が製作したことが鐫刻されています。

これまで、加藤市良右衛門(市郎右衛門)吉次は、元禄9年(1696)から正徳2年(1712)の間に、加藤半六は、宝永5年(1708)から元文3年(1738)の間に活動していたことがわかっています。また、加藤半六は、のちに「半六吉次」と名乗るようになるので、市良右衛門と半六は、親子か兄弟であったことが想像できます。



上野原市瑞光寺の梵鐘

この2人がそれぞれ作製した梵鐘は、市内では龍光寺、桂福寺、喜福寺などに、市外では日の出町の宝光寺などにもあったそうです。残念ながら、加藤市良右衛門吉次と半六の製作した梵鐘のほとんどは、戦時中の供出などで失われてしまいました。

現在、加藤市良右衛門吉次製作の梵鐘で、現存するものは、港区の種徳寺にあるものだけで、加藤半六作のものは、現存していません。

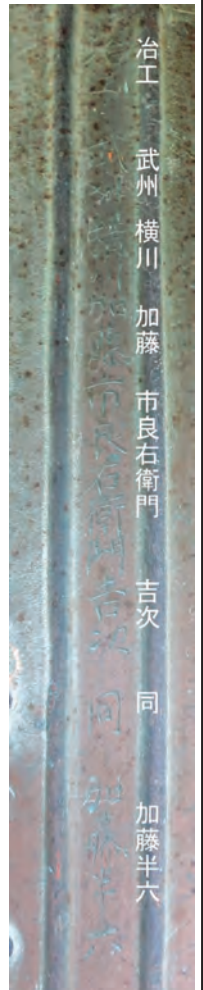
今回紹介した梵鐘は、加藤市郎右衛門吉次と半六が近親であることを示すだけでなく、加藤半六の関わった梵鐘のなかでも、現存する初めての例といえるでしょう。

最後にこの梵鐘のある瑞光寺の位置について考えてみます。

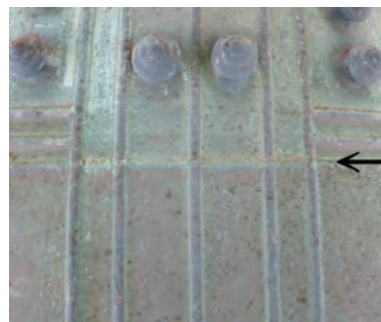
上野原市内のなかでも、この柗原から檜原村に至る峠道(栗坂峠)は、中世からのメインルートであったといわれます。五日市の石を使った石造物(宝篋印塔)が、ここでは確認されています。

梵鐘鋳物師は、その大きさや重さのため自ら出張し、製作するといわれます。加藤市郎右衛門吉次と半六も八王子横川から出張してきたと考えられます。前に述べた檜原を通る栗坂峠のほか、江戸時代には、甲州街道が整備されますが、ほかに佐野川往還なども地域の道として古くから機能しています。

2人の加藤鋳物師は、どの道を通って柗原にやってきたのでしょうか。興味の尽きないところです。



鋳物師銘



梵鐘の胴には、上下2箇所に鑄型どうしの継ぎ目が残る。写真は、上部の継ぎ目で、下部のものは、撞座の近くにある。



龍頭の前には、金属を鑄型に流し込んだ際の舌状の痕跡が残っている。